

北国の生涯型住宅(下)

北海道大学工学部建築学科
助教授 野口孝博氏

50

集いの暮らし・・・ともに暮らすかたち

お客を招いて一緒に一時を楽しく過ごすということは、これからの社会で大いに求められてくることです。その際どこで接客するかということがポイントで、「居間」や「応接間」といったものの他にも色々な形があっても良いのではないかと思います。

ここでは玄関での接客をもっと普通に考えてみたいと思います。

玄関に先ず人が入ってきます。そこで用事を簡単に済ましてしまうお客もいますが、そこに座って、お茶を飲んで長話をしたりという、素朴な接客法があってもいいのではないかと思います。

北海道の住宅は特性上、縁側がありません。縁側は本州では今でも付けているところが多いのですが、これはある種の社交空間、第一次的な接客空間ということが出来ます。家の中に上がらなくても済む、気軽な「つき合い空間」なわけです。それは、家が地域に存在する場合に必要な近隣生活用の空間で、京都の町家の土間などはその類ですが、家の中に上がらないで気軽におつき合いする上で、大変上手く出来た空間です。近隣生活を大事な社会生活の一部と考えると、住宅にはそのような機能をもつ空間が必要になります。

北海道の家は、戦後そのような部分を切り捨てて来ましたが、今では非常に閉鎖的な家になってしまっています。このことはこの先大いに改善して行かなければならない点です。以前は北海道の家にも縁側が付いていましたが、防寒という観点から次第に切り捨てられていきました。縁側は内と外をつなげる空間ということの他に、そこが持っている社会性という機能があるのに、その機能まで切り捨てられてしまったわけです。

その切り捨てた機能に代わる新しいものが開発されたかということ、残念ながらそうはなっていないという

のが現状です。北海道の住宅のこれからの大きな課題の一つにそれがあります。地域の中で好ましい社会生活を保っていくためには、「近隣の人々と上手く付き合える」「気楽に人が寄れる」また逆に「家中から外に向けて情報を発信できる」部分をどのように家の中に組み込んでいくかということです。

縁側を復活させるということは、多分色々なことで無理があるので、玄関あるいは出入り口部分を、もう一つ新しい形にしていくということを考えても良いだろうと思います。

玄関から居間に上がるのと別に居間に接して「土間」を置き、いわば屋内の縁側を作った例があります。「土間」は気軽に立ち寄って、「縁側」に腰かけてお話をするという事を考えたものです。このお宅ではお隣に娘さん夫婦が住んでいます。その子供(孫)達がいつでもやってきて、この場所で色々話を聞かせてくれることを期待した設計です。具体的にどんな人が来て、どんな行動をとって、どういう暖かい場面ができるのかといったことを想像しながらこれからの家づくりをしていくべきと考えております。



だれでも便利につかえる玄関のこしかけ

ながめのある家・・・窓辺とバルコニー

北海道の家は「出来るだけコンパクトな形を目指しましょう」と私も一般的にはそのようにお薦めしていますが、そればかりが絶対ではありません。

状況によっては二つの部屋の間の中庭をとるような例も良いのではないかと思います。両側の部屋から、中庭を挟んでお互いに、そこに居る人の気配が分かるという仕組みです。例えば、2世帯住宅でお年寄りの気配が分かって安心だということがあります。これに加えての利点は、雪を両側から楽しむことが出来るということです。これからの北海道の生活の中に「雪を楽しむ」という要素は大いに取り入れるべきだと思います。

この中庭を利用して、雪の中でもバーベキューでもやっつけてしまうという設計があります。中庭にかまどを置いてそれを挟んで2世代が住んでいるという住宅です。雪を楽しむためには、一方で、いつでも「寒さ」から退避出来る工夫も同時に必要になります。

バリアフリーのデザイン

かいだん（ろうか）・・・優先して考える

住宅の階段はこれからますます大事になってくると思います。以前の住宅では一部二階建てで、子供部屋だけが二階にあるというのが一般的だったのですが、現在は、殆ど総二階建て、個室が全部二階に上がるというのが一般的になっています。あるいはその逆に二階に居間が上がるというケースも多くなっています。何れにしても、上階と下階の行き来が多くなってきています。さらに「永く使い続ける」ことになると、高齢者が上階に住むという場合も増えて来ます。したがって階段はもっと重視していく必要が出てきます。階段の作り方次第で、住宅の半分の空間が死んでしまう事にもなりかねないのです。

従来、階段というものは、一番最後に考えられたようなところもあって、あとで余ったスペースに無理やり当てはめた結果、急勾配の階段が出来上がってしまったというようなことも少なくありません。

また、日本では伝統的に階段を急に作っていたためか、急に造っても良いという意識が設計者の間でも、暗黙に存在するように思います。基準法でも45度以上の階段が許されています。本州の古い住宅では、これ以上のものもよくあります。

三階の余った空間を使うとか、面白空間にするならば、梯子のような急な階段もよいのですが、基本的には階段はゆったりと作り、場合によっては、途中で休んで、腰かけたり眺めたりできるぐらいに造られたら良いと思います。最近は、居間に開いている階段が多くなっています。以前ですと、階段というのは寒い空間で、廊下や玄関の脇に置かれていましたが、現在は家全体が均一に暖められるようになったので、階段から冷気流が下りてくることをそう心配しなくて済みます。そうすると、階段を居間の中に置くということも可能になってきます。つまり、階段がまさに住宅内の「動線」の中心にもなるのです。それならば、そこはできるだけユッタリとした空間にするべきです。場合によっては、階段を面白空間にしてしまう。階段は立体的に動いて使う空間ですから、子供達は喜んで使います。あるいは階段に座って本を読むとか、階段の蹴込みを本箱に利用するなどのことも考えられます。このように階段が楽しい空間として使われるようにぜひ工夫してほしいものです。

だいどころ・・・だれでも使える

キッチンセットの高さと食卓の高さを揃えておくと、高齢者や手が不自由の人が、食器を持ち上げないで、そのまま滑らせて持って来ることが出来ます。

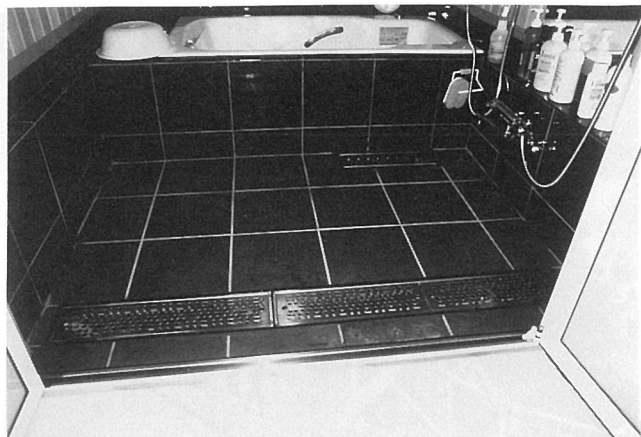
住宅が長い世代にわたって使われるとすると、台所も、高齢者や車椅子の人が使うためにも配慮が必要になります。

キッチンセットの下の部分を取りはずし可能にしておくと、そこを空けて、椅子を置いての台所作業や、車椅子での台所作業が出来るようになります。電動で高さを調節出来るようになっているものもあります。

台所のキッチンセットひとつ取ってみても、このような配慮がこれからは必要になってくるでしょう。

ふろ・トイレ・・・段差はいらない

ふろについてもいろいろな案が出ていますが、トイレ、洗面器、浴槽が寝室から直線的に配列されているのもそのひとつです。これは、高齢者や障害者の方がおられれば、なるべく近いところにそれらを設けるといことその他に、水平トランスファー（人を運ぶリフト）のレールを設置する場合のことを考えているのです。住宅を百年も使おうと考える場合は、当然そのようなことがある事を想定しておく必要があります。ト



床はフラット仕上げ

ランスファーを天井に流すことを考えれば、当然、直線配列にしておく方が有利です。もちろん、平面図だけでなく、梁の置き方や、ドアのつけ方にも工夫をしておくことが望まれます。

お風呂は、最近かなり、そうなってきましたが、手すりの設置はもう普通になって来ています。大事なポイントは、風呂の床には「段差をつけない」ということです。最近ではドアの水密性も良くなっておりますし、排水溝の設置でほとんど水はストップされますので、風呂場への仕切りは必要なくなります。そうすると、車椅子でも楽に出入りできますし、足の悪い人でも楽に出入りできるのです。

また椅子やベンチを風呂場の中に置いておくというアイデアもあります。また「移乗台」といってありますが、浴槽と同じ高さに座るところがあって、一旦そこに腰をかけて、そのあとゆっくり足からお湯に入れてゆくという便利な方法が考えられています。

トイレには手すりをつけて置く配慮が欠かせません。車椅子の事を考えるとドアの幅は十分に広くとることが必要になります。

「部屋は出来るだけフラットに」と言いましたが、場合によっては、こういうやり方もないではないと思います。

つまり、居間の一部に小上がりのような部分を作って42～3cm上げておきます。これは車椅子の高さに合わせた小上がりで、車椅子からそのまま体を移せるようにしてあるわけです。

へやのドア・・・ひき戸を見なおす

ひき戸が便利な場合がたくさんあります。ドアの場

合ですと、開け閉めに体の移動を伴いますから、高齢者や障害者には負担となります。ひき戸は、最近は大変軽く開け閉めができるものが出てきましたから、自分の体をあまり動かさなくても開閉ができるようになりました。またそれだけ幅が広くとれることから、介助しながらの移動、車椅子の移動もそれだけ容易になるわけです。基本的には、なるべく不要のドアは付けないで、全体を開放的にするのが一番良いのですが、付ける場合は、ひき戸を考えたらと思います。

把手をどうするか、ということも大事なことです。ドア、引き出し、襖等の把手類はこれから、大いに見直さなければなりません。襖の把手はどうしてあんなに浅いのでしょうか。高齢者で指の力の衰えた人にとって、襖の開け閉めは大変難儀です。

ドアの丸い把手も問題です。これは「握り」がしっかり出来る人しか使えません。これからはレバー状のものか、そうでなければ「ひっかかり」があるものを普通に行かなければならないと思います。この方面の工夫はもっともっとおこなわれ、北海道に適した良いものが出現することが望まれます。

フランスに、ル・コルビジェという有名な建築家でしたが、この人が設計したアパート（集合住宅）がマルセーユに残っています。それは50年ほど経っていますが、今でもしっかりと使われています。住んでいるのは70歳か80歳ぐらいの高齢者が多いのですが、みなさん大変奇麗に、そして不自由なく使っています。そのうちの1軒を見せていただいたのですが、ドアなどの把手が異常に大きかったことに印象を強く持ちました。クローゼットの引き戸の把手など、大きなひれ状の優美なデザインのものでした。50年前ですから、コルビジェが高齢者のことを考えてデザインしたとは思えませんが、結果としては、高齢者が満足して利用しているわけです。

移動と外出しやすい環境

出入り口のくふう

玄関など出入り口は、出入りし易いようになっていることが、当然望ましいのですが、さらに中にベンチを設けておくのは良いことだと思います。これは高齢者ばかりでなく、誰でもそこに腰を掛けて、靴を履き替えたり手入れしたり、ちょっとした荷物を置くのにも、便利でしょう。少し発展すれば、先程の「縁側」

と同じように、一種の「接客空間」としても使えるのです。

移動支援機器

玄関はフラットにするということが、ひとつの理想形として考えられます。もし段差をつけるとしても同時にスロープを付けられるようにするか、あるいは機器を利用して、車椅子を上下できるようにする、すなわち段差解消機というものも考えられます。これは最初から設備しておくタイプと後から工事で設置できるタイプができております。

階段用にも色々の装置が開発されていますから、場合によっては、こういうものも利用出来ます。将来的には上下の移動を、こういった機器に頼らなければならぬ場合もあります。そういうときには、階段昇降機か、ホームエレベーターを考えます。それも最初から付けておかなくても、あとから付けられるように、スペースを確保しておくということが積極的に考えられても良いのではないかと思います。

アプローチの雪処理

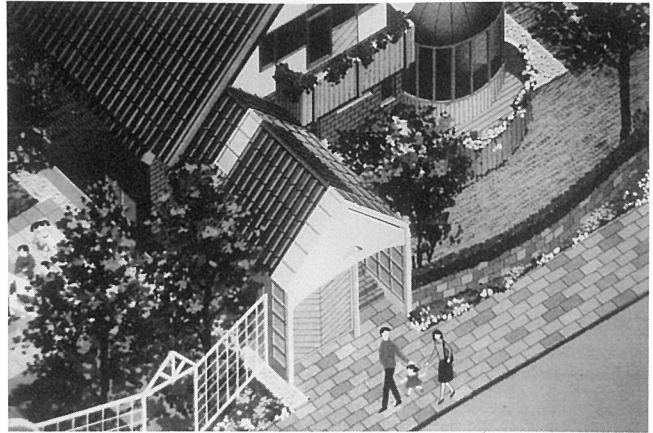
一戸建ての住宅でも、もう少し雪と上手く付き合える形を考えても良いと思います。

これには色々な考え方があると思いますが、ひとつは、アプローチを集約するというやり方です。玄関、車庫、物置などをバラバラに配置しておく、結局それぞれを全部除雪して置かなければなりません。そこで、こういうものを上手く全部纏めておくと、除雪は一か所で済むという考えです。

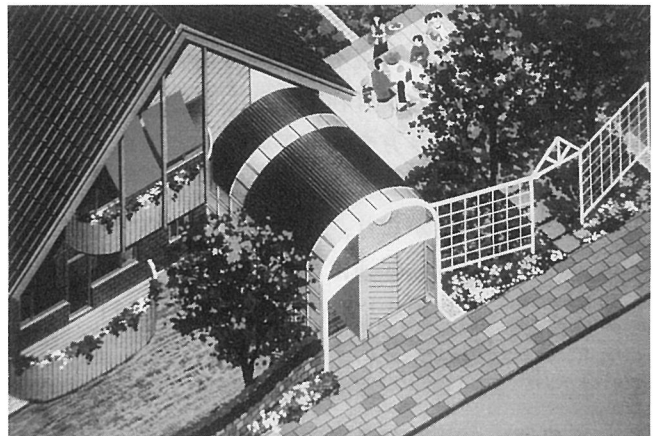
さらにこれを発展させると、車庫、物置、玄関をグリーンルームと呼んでいる「雁木」あるいは「風除室」の回廊でつないで、それをワンセットにしたものを建物から突出させるやり方があります。こうして、玄関、物置とつないで入って行けるようにしたものです。これは、先程説明した「土間」の考え方と一致するものです。こうすることで除雪は一か所で済むわけです。

「雁木」の回廊は屋根が三角のものや、円いものや色々ですが、町並みの景観に係りてきますから、これのデザイン開発は今後の課題だと思います。

また、このようなものが出てくるのであれば、それがあることによって、町並みが楽しくなるようなデザインにしていくことがぜひ必要だと思います。上手くデザインすると、夜にはそこの照明が、家々の表情を



車庫・雁木のデザインA



車庫・雁木のデザインB

見せ、楽しい町並みを演出してくれると思います。

どうせ作るなら、自分も雪で助かるというだけではなく、自分が作ったもので、皆さんに楽しんでいただくというふうに、これからの「町づくり」「家づくり」をしていく必要があると思います。そして、それがきっかけとなって、出入り口のまわりが自然な「付き合い空間」になっていくのが、理想です。

何かの情報発信をしないと、人には寄ってもらえないし、関心も持ってもらえません。だから単純に「雪処理に便利」だけでは、「付き合い空間」にはならないので、色々な意味を持たせた作り方をしていくということが、大事になると思います。

隣どうし、一緒に雪処理することを考えて一部の敷地を共同利用するのもよい方法です。夏にはその敷地をサブの庭として、隣同士が共同で、洗濯物を干したり、家庭菜園にしたりして利用することが出来ます。共同のバーベキューコーナーにするのも楽しいでしょう。

「共同で雪処理」というのは、これから大いに考えたら良いことだと思います。共同のやり方は色々あるのですが、最低限2軒でやるのも共同ですので、こういうやり方もあるというご紹介です。

おわりに

これからの「住まいづくり」あるいは「環境形成」の考え方として、我々はどんな暮らし、どんな生活を求めるのかというライフスタイルをきちっと皆で持っていくという事がまず大事だと思います。これは、ひとりひとりが持つということが勿論大事ですが、住まいの提供者側は、このライフスタイルを「捉える」ということが必要になります。「捉える」ということをどのようにして実現するか、これは簡単に「どんな暮らしが良いですか」という質問程度では済まない訳で、ひとつひとつ細かいところまで落としした捉え方をしていく必要があります。例えば、先程いきました「把手のあり方」、「車庫の中でどんな活動ができるのか」、そういう踏み込んだ捉え方をして、空間を提案していくことが必要で、それによって、使う材料から何から違ってくるわけです。

それから、「住み続けられる家」を考えるならば、はっきりいって、百年ぐらいの年月を想定する必要があります。十年後ぐらいまでならば具体的に想定するのは難しいことではありませんが、20年後、30年後、50年目には何があるかということ具体的に考えて、メンテナンスの在り方や、住む人の変化があった時に

は、「どの部分をシステムとして取り替えたら良いか」とか、リフレッシュのやり方とか、そういうことを長期にわたって、具体的に示して行かないと、「永く住み続けられる家」とはならないのではないかと思います。

（文責：北村 維朗）

講師紹介

のぐち たかひろ

現職 北海道大学大学院工学研究科 助教授

略歴 1949年 釧路市生まれ

1971年 北大工学部建築工学科卒業

1978年 同大学院修了（工学博士）

同年 北海道大学助手

1993年 同助教授

著書 「北海道の住宅と住様式」

「雪と寒さと生活－発想編－」など

その他の公職

北海道福祉環境アドバイザー、北方型住宅団地コーディネーター、北海道通産局ウェルフェアテクノハウス研究会住環境部会主査 など

この講演は平成9年11月21日、旭川市ニュー北海ホテルで開催された、当協会第33回総会の特別講演として行われたものです。とくに講師のご了承を得て誌上で紹介いたします。

WOODY クラフト

コーヒーカップ

高橋木工木地製作所（旭川市）

樹 種：えんじゅ

サイズ（口径）：17cm

価 格：左 3,675円

右 3,255円

コーヒーの香気がそのまま形になりました。



北海道の木材技術情報誌

「ウッディエイジ」を読みませんか

北海道林産技術普及協会では只今、**新会員**を募集しております。**ご紹介**ください。

「ウッディエイジ」には、北海道立林産試験場の研究成果の最新情報をはじめ、北海道の地域特性を重視した、実践的な木材技術情報がいっぱいです。

※詳しい入会手続きにつきましては、下記にご照会ください。

〒071-0181 北海道旭川市西神楽1線10号
社団法人 北海道林産技術普及協会

☎ (0166) 75-3553

FAX (0166) 75-3553

WOODY クラフト

コルトパイソン

ササキ工芸（旭川市）

樹種：ウォールナット、みずなら

サイズ（長さ）：28cm

価格：8,500円

実物大の精巧なスケールモデル。

ゴム輪の弾丸で射撃ができます。

